

博士學位論文

内容の要旨

および

審査結果の要旨

甲第105号

2012

創価大学

本号は学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規程による公表を目的として、平成25年3月21日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位番号に付した甲は、学位規則第4条1項（いわゆる課程博士）によるものである。

創価大学

氏名（本籍）	張楠（中国）
学位の種類	博士（人文学）
学位記番号	甲第105号
学位授与の日付	平成25年3月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 創価大学大学院学則第17条第2項 創価大学学位規則第3条の3第1項該当
論文題目	『源氏物語』と道家文化
論文審査機関	文学研究科委員会
論文審査委員	主査 西田 禎元 本学教授 委員 水谷 誠 本学教授 委員 森村 森鳳 同朋大学准教授

博士論文審査および最終試験報告書（課程博士）

主査	西田 禎元	本学教授
委員	水谷 誠	本学教授
委員	森村 森鳳	同朋大学准教授

博士（人文学）学位論文申請者

氏名：張 楠（チャン・ナン）（女）

生年月日：1978年7月10日（34歳）

論文題目：『源氏物語』と道家文化

I. 論文内容の要旨

本論文は、日本古典文学の代表作品である『源氏物語』について、道教や道家の思想・文化の視座から考察した、比較文学の基礎的研究である。

序章・終章を含めて全8章27節36万字余に及ぶ長文であるが、全体の構成は以下のとおりである。

序章

- 1 はじめに
- 2 研究目的及び研究方法
- 3 先行研究
- 4 研究内容及び範囲

第1章 道家文化の東漸

- 1 道家文化とは何か
- 2 道家文化の東漸の経緯
- 3 聖徳太子の道家思想
- 4 日本古代国家の展望 一道教を国教とした北魏の王朝—
- 5 上代文学における道家文化の受容
- 6 神道における道教の浸透

第2章 『源氏物語』創作における作者の意識

- 1 道家文化を底流としての「唐風」文化
- 2 平安文学における道家文化の受容
- 3 紫式部の思想の形成

第3章 『源氏物語』における道家文化的な発想

- 1 物語の輪郭
- 2 物語の巻名
- 3 物語の筋書き
- 4 作中人物の名前
- 5 主要人物のイメージ

第4章 『源氏物語』と道家の術数学

- 1 術数学とは何か
- 2 術数学の源流
- 3 『源氏物語』における術数学の受容

第5章 『源氏物語』の神仙思想

- 1 道家の神仙思想
- 2 『源氏物語』における神仙信仰の受容
- 3 『源氏物語』における仙境崇拜の受容 — 「若紫」巻と「胡蝶」巻を中心に

第6章 『源氏物語』の行事における道家文化の受容

- 1 上巳・桃の節供（雛祭り）
- 2 七夕・「乞巧奠」

終章

表1 平安時代の文学に登場する「老荘」

表2 『源氏物語』に引用された漢籍

<内容の要旨>

本研究は、『源氏物語』と道教といった、これまで十分に検討されてこなかった研究分野に、<道家文化>の視座からアプローチした論考である。

序章においては、研究の目的や方法等について、『源氏物語』に顕著な仏教の影響とともに、中国文化を広く摂取してきた日本の文学事情にあって、中国の伝統文化の源である<道家文化>の視座からの検討を進めることの意義に言及している。

第1章「道家文化の東漸」では、<道家文化>の概論ともいえるべき趣きである。

<道家文化>の定義について検討を試みた後、源流や本旨について、多くの漢籍を参考

にしながら、東漸以前の問題について考察を加えている。

東漸の主題については、中国 → 朝鮮半島 → 日本の基本図式に則り、特に聖徳太子の思想への影響に言及する。

文学の分野においては、上代文学の記紀万葉や懐風藻に投影されている道家文化に触れている。

第2章『源氏物語』創作における作者の意識』では、主として平安時代における〈道家文化〉の受容と、『源氏物語』の作者といわれている紫式部にふれ、式部が仏教とともに道教関係の漢籍にも通暁していたことなどを論述している。

道家文化 → 唐代文化 → 国風文化と投影・変遷する状況の論述は興味深い。

第3章から第6章までは、いわゆる『源氏物語』への投影というテーマであるが、物語の具体的な事象を示しながら、多方面からの詳細な考察が見られる。

先ず、第3章第1節では、「物語の輪郭」と題して、白居易の「長恨歌」を踏まえた構成にふれ、死者の魂を捜し求める道士の構想が、物語主人公たちの〈鎮魂〉に繋がると述べる。

また、第2節では、物語の重要な構想の一つである〈三段の予言〉が、〈陰陽五行〉などの道家文化の思想を反映していると述べる。

更に、第4節の「作中人物の名前」においては、先学の論考を参考にしながら、人物や場所の呼称である〈壺〉について、〈神仙境〉に繋がる意識であるという論述は興味深い。

第4章の「道家の術数学」に関しては、第3節において、〈観相術〉・〈算命術〉・〈風水術〉・〈占星術〉・〈雑占避凶術〉・〈占夢術〉などの観点から、詳細に物語世界を開示し、主要人物の運命や生きる世界が、〈宿曜〉・〈陰陽〉・〈卜筮〉・〈夢占い〉などによって構築されているといった考察も興味深い。

第5章の「神仙思想」に関しては、第2節において、〈仙人〉・〈仙女〉・〈反魂〉といった神仙思想にふれ、主要人物のイメージや、事件の構想への反映を述べる。

また、第3節においては、物語のヒロインである〈紫上〉ゆかりの〈北山〉と〈六条院・春の町〉を、〈仙境〉と捉える論述も興味深い。

第6章の「行事と道家文化」では、「上巳・桃の節供」と「七夕・乞巧奠」を取り上げ、〈禊〉・〈祓〉・〈流し〉の行事と、災厄を除く〈桃〉の役割等が道教の思想から由来することを述べている。

終章においては、今後の課題等にふれ、〈道家文化〉における〈母性の尊重〉という特性と、『源氏物語』における〈母なるもの〉との関連を示唆している。

物語の作者が女性であることや、物語主人公の人生が〈母〉を求める旅であったことを

思うとき、この課題は重要である。

II. 審査結果の要旨

審査委員は、本論文を精読し、以下のように評価した。

本論文は、論題が示すように、研究の対象と方法が斬新で、今後の『源氏物語』研究に新たな道筋をつけたという点が、先ず評価される。また先行研究や多くの和漢の資料を駆使しての詳細な論述でもある。

大学院の博士前期課程までは、中国文学を専攻してきた学位申請者が、本学に留学してからの三年半で、難解な古典で大長編の『源氏物語』に挑んだ勇氣は高く評価される。

やや客観性に欠ける強引な論述や、道教関連の概念の把握や定義づけの不明確な点や、誤記などの不備など少しく問題点もあるが、総じてユニークな論考として評価し、三審査委員ともに <合格> と判定した。

III. 最終試験結果の要旨

学位申請者は2004年6月に中国東北師範大学大学院文学研究科中国古典文学専攻博士前期課程を修了、2009年9月本学大学院文学研究科人文学専攻研究生として入学、翌2010年4月同研究科人文学専攻（日本文学日本語学専修）博士後期課程に入学、現在同課程の3年生である。

本学の日本語日本文学会をはじめ、中国の社会科学院日本文学研究会・中国比較文学学会の会員として、それぞれの研究会や国際シンポジウムで口頭発表を行うとともに、研究会の機関誌や他の雑誌に論文を発表するなどの研究活動の状況である。

今後は中国に帰り、教師として教育・研究に従事したい希望を聞いているが、そうした意味で、本論文の不備を補った後に、その成果を著書にして学界等に問うことや、中国語に訳して多くの人たちに読まれることを期待したい。

日本の古典文学を研鑽した中国の人文学博士が、日中両国の言葉で、『源氏物語』について教授する日が一日も早いことを願っている。

最終試験においても、三審査委員ともに <合格> の判定で、本論文は「博士（人文学）」の学位を授与するに値すると認められる。